

あなたの手に触れたくて

愛宕無

『あなたの手に触れたかった……』

彦星と織姫が天の川にかかる橋で再会している七月七日の夜。恋人たちが彦星と織姫のように逢引をしている中を、土師幽（はじゆう）は人ごみをかき分けるようにして逃げていた。

「私だけって言ってたじゃない。それなのに他の女と付き合って。許さない」

鬼面をつけたような表情で憤怒している女が叫びながら追いかけてくる。少し厚めに塗った化粧が崩れるのも構わないようだ。

「俺に触れていいのは魂緒（たまこ）だけだ」

意味不明なことを後ろも振り返らずに叫び返す。

そんな様子を何組かのカップルが注目し始める。

「何あれ〜。おもしろ〜い」

「ほんとだな」

指を差して笑う者、興味深げに眺める者たち。その目があると逃げにくい。だから、まづ逃れようと路地裏へ入る。

それが間違いだった。

『ドスっ』

右に左にジグザグに進んでいき、女の声は遠ざかっていく。そして何回目かの角で何かとぶつかった。

幽は勢いがついていたために衝撃は強く、ぶつかったものを吹っ飛ばしてしまう。

衝撃の割には当たった感触は柔らかく、逃げているにもかかわらず思わず足を止めてしまった。

そこには薄いピンク色の和服を着た女の子が転がっていた。

「ごめん。大丈夫か？」

幽はその女の子に声をかける。男だったらそのまま走り去っていただろうが、女の子なら足を止めるしかない。それが、幽の体に染みついた習性なのだから仕方がない。

「うう〜うう〜」

唸り声をあげるだけでそれ以外の反応を見せない。

心配になった幽は、しゃがみこんで声をかけ続ける。

しばらく声をかけ続けた結果、女の子はなんの前触れもなく立ち上がる。そして、声を発する。

「さっきぶつかったのはお主なのか？」

しゃがみこんでいた幽は、見上げる形で女の子を見る。

倒れているときは全然わからなかったが、小さかった。一三〇センチあるかないかといったところだろう。艶のある黒髪は腰のあたりまで伸び、背中らへんで束ねられている、丸い輪郭、白い肌、丸い目は背の低さも相まって子どもっぽさを増している。

「ああ……」

かわいいというよりもかわいらしい女の子に、幽はうまく言葉を返せなかった。

「お前のせいじゃ、お前のせいじゃ」

胸の前で拳を作っている。その拳は怒りで震えているようだ。

「ちよつと待てよ。意味が分からない」

ケガはしていないようだが、頭を打ったのかもしれないと不安になる。「お前のせいじゃ、お前のせいじゃ」と連呼しているのが、その証拠だ。

今日は、女運に見放されているなど、心の中で呟く。

「問答無用じゃ」

女の子は拳を振りかぶる。

「こつちから幽の声が聞こえたような気がするわ」

そのとき、声が聞こえた。

女の子の声だと、幽は瞬時に気が付いた。

「まだこの辺りを探してたのかよ。しつけーな」

嘆息すると、行動に移す。女の子の手を取り走りだす。

「なんじゃ？ 何ごとじゃ？ 離さんか。このうつけが」

女の子が喚き散らす、今の幽には届いていなかった。今の幽に届くものは、追ってくる女の子の声だけだ。その場から逃げ、女をまくことだけに集中している。

幽はそのまま大通りへでた。路地裏をそのまま逃げるよりも、今は人ごみに紛れた方がいいとの判断からだ。そして、その判断は功を奏し、近くにあった駅からこうして電車に乗れているというわけだ。

まだ時間が早いためか、ちよつと遅めの帰宅をしているサラリーマンがぼつぼつといるだけの車内で、ふと気づく。幽の右手がつかんでいるもの。女の子の左手に……

「×○□△◇▽」

言葉にならない声を発する。その声に反応して乗客の目が一斉にこちらへと向かう。しかし、何も怒鳴られることもなくすぐに幽から視線が離された。

幽は何も乗客から言われなかったことを少し不思議に思いながら、いったん息を整え言葉紡ぐ。

「その、ごめんな。こんなとこまでつれてきて」

「まったくなのじゃ」

女の子は腕を組み、怒って見せる。

それに、ただただ謝るしかなかった。なんどもなんども頭を下げる。

その間にも電車は駅のホームに到着し、乗客の乗り降りが開始される。

「お母さん。あの人なんで何もないとこで頭下げてるの？」

母親と一緒に乗ってきた、無邪気な男の子が幽の方を指差しそう言う。

「しっ……見ちゃだめよ」

変な人を見る目で幽を見ている。もともと乗っていた客も気まずそうな顔をしている。まるで、その場に女の子がいないような……

それに気づいた幽は、閉まりそうなドアから一人列車から飛び出す。

「駆け込み降車は大変危険ですのでお止めください」

車掌さんに冗談っぽく注意される。そして、電車はそのまま駅から遠ざかって行く。

「あっ……」

女の子を電車の中に置いてきてしまった。

「まあいつか」

「何がいいのじゃ？」

幽は飛び退く。狐につままれたような顔をしている。

「なんでここに？」

手を確認するが、握っているわけではない。もちろん、手にぬくもりは感じられず、握っていたわけでもない。さっきの時間で出てきたとも考えにくい。

「おっ、お前なんなんだ」

「わらわか？ わらわは幽霊なのじゃ！」

窓から光が差し込む。カーテンを閉め忘れ、初夏のほんのりと熱い日差しが顔を照らす。

時計を見ると学校に行くには少し早い時間。かといつてもう一度寝るには中途半端な時間。幽はふらっと立ち上がった。

「長い夢を見たような……」

非現実的なこと。幽霊が目の前に現れた。

「幽霊なんて存在するわけ……」

「ここにいるが」

幽の言葉を遮って、女の子が反応を返す。

幽は飛び退く。狐につままれたような顔をしている。昨日と同じ反応に加え、母親からの「うるさい」という声。

冷静になって昨日のことを思いかえしてみる。

女の子の名前は霊子（りょうこ）。幽霊らしい。らしいというのは、足はきちんと地について歩いており、透けるわけでもなく、触れることができる。幽が想像する幽霊像とはかけ離れていたためだ。

それに、なぜか幽だけにしか見えない。

「かわいいからいいか」

幽は唐突に口にだす。

「かつ、かつ、かわいいとな。わらわがかわいいと……」

霊子は赤面する。

「事実だから仕方ないだろ」

「軽薄じゃ。軽薄なのじゃ。そんな男は嫌いじゃ」

霊子はふりふりと怒ってしまふ。

「だったら、俺から離れるよ」

「それができたらやつとる。それができんからここにおるのじゃ」

そう。霊子はなぜか幽から離れられなくなった。

悪霊という感じはしない。かといって守護霊にしては弱い。まあ、害はなさそうだし放つておいても大丈夫かなと思っっている。

幽は時計を確認する。少し早いのが、学校へ行くこうかと、汗ばんだTシャツと短パンを脱ぎ始める。

「ななな……何をしておるのじゃ？」

霊子は幽の裸を見て動揺している。

一方で幽はなぜ霊子が動揺しているのか、理解できていない。女の子には裸を見せなれているからだ。

「未婚の者が、はっ、肌を見せるものではないぞ」

「ああ、そんなことか。見たくないなら後ろでも向いとけ」

肌ぐらいで動揺してどうする。幽と霊子との考えには溝がある。

「お前は服着替えないのか？」

後ろを向いている霊子に話しかける。

「別に着替える必要はないからな。汗もかかぬし」

「そういうわけじゃなくて、気分的に他の服を着てみたいと思わないのか？」

「着替えられんことはないが、今はこの柄が気に入っておる」

「今の服も似合いそうなくらい、かわいいのにもったいない」

冗談と言うわけではなく、幽は心からそう思う。だから、口からすんなり言葉がでてきた。

「わらわがかわいいとな」

「ああ」

霊子は顔を先ほどよりもリングゴのように赤らめ、うつむいていた。

「終わったぞ」

「そうか」

何もなかったと。気持ちを落ち着かせようとして言葉少なめに返事する。

「じゃあ行くか」

「どこへ？」  
「学校」

二限が始まるには少しばかり早いためか、大学のキャンパスにほとんど人がいない。その中を、幽霊をつれ幽は歩いていった。

「じゆう！ はよっ」

後ろからそんなあいさつが聞こえてきて、次には首に腕を巻きつけられていた。

「浩介、おはよ」

幽はあいさつを返す。

浩介は幽が大学で一番仲良くしている友人だ。新入生キャンプで仲良くなって今までの付き合いだ。

「じゆう？」

「俺の名前、土師幽だろ。『は』を抜いたら『じゆう』になる。それがあだ名になったんだよ」

幽は霊子に懇切丁寧に説明してやる。

「じゆう。お前何言ってるんだ？」

(しまった……)

幽が他の人に見えないことを頭の隅に追いやっていた。

「独り言だ。独り言」

「独り言……？ まあいいか」

浩介は納得していないようだったが、取り合えず話しを合わせてくれる。

「それより、昨日の七夕デートどうだったんだよ？」

「ああ。あれな……彼女とデートしてる時に、偶然他の彼女とあつてさ。ぶち壊し。追いかけてまわされて、大変だった」

「ハハハ……爆発しろ。リア充が！」

「追いまわされてもいいなら紹介するけど」

「遠慮しとくわ」

そんな他愛もない話をしながら、講義室へと入る。必修の講義のため二回生か、再履修を喰らった三、四回生の教室。講義が始まるまでの時間を会話に花を咲かせていた。

そのうち、浩介がトイレに立ち、幽が一人になる。その時を見計らって、霊子に気になっっていたことを訊ねる。

「そういえば、今日はお前に触れられなかったけど、どういうこと？」

「よくわからないが、七月七日に一人だけしか触れられないらしいのじゃ。まあ、わらわの姿を見られたのも、このように憑りついたのは初めてじゃがな。なぜじゃろうか？」

「わかるわけねえだろ」

浩介が戻ってきて。チャイムが鳴る。教授はきていないが、授業の体制になる。

「そういえば、お主はモテるのか？」

席に着いた幽の隣に腰を掛けた靈子にそんなことを訊かれる。

幽は、反対側に席に座っている浩介に気をつかいながら答えた。

「そこそこ、モテるかな。でも、本当に好きな人にモテなきゃ……」

最後は自分に言い聞かせるように呟く。

幽は非常にモテる。

背が高く、顔も整っている。それに加えて、話しくいということもない。

七月八日現在交際人数は三人もいる。さらには、交際寸前までいっている娘も数名いる。とつかえひつかえということはないが、愛しているかと言われればそこまで愛していない。というのも、幽には本当に好きな娘がいるのだ。

その娘——井上魂緒とは高校でであった。魂緒は生徒会執行部に所属しており、幽は女たらしの問題児。なんども生徒会室に呼ばれ、指導を受けていた。もちろんそのため、最初はお互い険悪な仲だった。

そのうちに、幽は自分にきつく言ってくれるのは魂緒だけだと気づく。何か問題を起こしてもきつく言ってくれるのは教師も含めて、魂緒だけだった。次第に特別な感情を持つていった。

だが、好意は伝えられずにいた。他の女の子には簡単に言える「好き」という言葉。そんな簡単な単語が喉の奥につまって、でてこない。

だから、魂緒とかかわりを持つために小さな問題をたくさん起こしていった。そうすれば彼女と一緒にいられるから。

そんな幽にも転機が訪れる。

幹部に昇格した魂緒が生徒会で大きな失敗をしてしまい、罷免案が提出された。反省を促せる許容範囲を超え、罷免せざるを得なかったのだ。問題児の幽が教師たちに取り合ってもらえるわけなく、数日後に罷免された。

罷免されたあとも学校中からバッシングを受け続け、ついに魂緒は不登校になった。

幽は魂緒が不登校になってから毎日のように家へと通うようになる。最初は拒否され続け、会ってもらえなかったのだが、雨の日も風の日もそれを数週間続け、少しずつ会えるようになった。

そして、学校でも魂緒についてのバッシングを止める活動をして、魂緒が戻れる場を作っていた。

それが実を結び魂緒は学校に通えるようになる。

さらに、魂緒とつきあうことになった。他の彼女たちと別れたのは、言うまでもない。

だが、付き合い始めて一年半を迎えようとしていた卒業まぢかの三年生の冬。二人の関係が大きく変化する。

いぜん幽と魂緒の仲は良好だった。そのため、ケンカして不仲になったというわけはない。

関係が大きく変化してしまったのは魂緒の父親が関係していた。海外赴任していたらしい魂緒の父親が戻ってきたのだ。魂緒の家は地元では有名な資産家で、魂緒には許婚がいたのだ。そのため、魂緒の父は幽との交際を認めなかった。さらには、幽の手が届かないところへ魂緒を隔離してしまったのだ。

それ以来、魂緒とは会っていない。

二、三、四限の講義を終えた夜。

幽は十歳も年上の彼女の一人と会っていた。

「ゆ〜くん。好き」

甘えた声で囁いてくる。

幽は気分が乗ってこない。魂緒のことを思いだしたからだ。

やはり、今の彼女たちは魂緒の代わりでしかない。最低なのはわかっているが、切り替えができていない。忘れることはできない。

「ごめん。別れよう」

これは気まぐれだ。この彼女が、悪いというわけではない。

こんなことはよくあった。

幽は黙って、歩きだす。

「待って。私、頑張るから。若くいるから」

それでも、黙って歩き続ける。

「いいのか？」

霊子が隣で話しかけてくる。

「いいんだ」

「辛そうに見えるのじゃが」

霊子にはそう見えた。

幽も辛くないわけがない。今まで、何人もふってきたが、そのたびに自己嫌悪に陥る。

魂緒の代わりはいない。だが、魂緒の代わりを探している。

そんな矛盾が幽を苦しめているのだ。

幽はそのまま夜の闇に消えていった。その傍らに霊子が寄り添って……

次の日もそのまた次の日も女の人と遊ぶ。

魂緒の幻影をかき消すかのように。

それを見るのが、霊子は辛い。まだ、出会ったばかりだが、幽が無理をしているのがわかった。

守護霊。悪霊。なんでもいい。一度であったからには、縁が必ずある。何で苦しんでいるかは、霊子にはわからない。力になりたい。日を重ねるごとに、そう思うようになった。だから――

「紅葉を観に行きたいのじゃ」

木々が色づき始める十月の終わり頃。霊子は駄々をこねる子どものように幽にお願いした。

「なんで？」

「なんでって……紅葉を観に行くのが毎年の恒例行事なのじゃ」

幽を元気づけるためというのは気恥ずかしく、かといつていい理由も見つからない。

「めんどー。一人で行ってこい」

「それじゃだめなのじゃ」

いきなり語気を強める。

「いいから行くのじゃ。明日行くのじゃ」

そんなこんなで、幽はしぶしぶ了承するのだった。

次の日。

二人は嵐山にいた。

山の上の方は色づき始めているが、下の方は未だに青々と茂っている。まだ、紅葉狩りのシーズンには早いため、観光客の姿を見かけることはほとんどない。

「きれいだな」

古い町並みから眺める山を見て、幽は呟く。

「今の俺とは正反対だな」

青い純粋な葉っぱは幽の心とは違う、青春の心。もう幽の心は色づき終わり、枯れ葉同然。

「俺……霊子に……」

幽は山の方から、霊子の方に視線を移す。それから、言葉を詰まらせながら言葉を紡ぐ。

「何？ 話してみるがいい」

霊子は、幽の悩みについて話してもらえると期待する。

「……ごめん」

結局、その日、幽の口から悩みを話されることはなかった。



「好きだ。付き合っしてほしい」

次の日、幽にまた新しい彼女ができた。

『ジングルベル、ジングルベル……』

街にクリスマスソングが流れ始めた十二月。

恋人たちはクリスマスへ向けての準備を始め、恋人がいない者たちも恋人を作るためにも忙しく動く。

幽はもちろん前者だ。現在、彼女が四人いるため、今年のクリスマスの予定を立てるのに苦労している。後者の男たちに刺し殺されても仕方のない悩みである。

結局、二十三〜二十六日の夜に分散させることで落ち着いた。二十六日の娘にはバイトの休みが取れなかったと嘘をついて納得してもらったのだ。

ここは幽の部屋。予定が組めてひと段落していた。

「幽は女性に対して敬意が足りないと思うのじゃが」

そんな幽に、霊子は面と向かって言う。最近、幽は霊子にこのようなことを言われ続けていた。最初は軽く受け流していたのだが、なんともなんとも言われているうちに受け流す余裕がなくなっていた。それが、次の言葉につながるというわけだ。

「……うるさい」

ぼやくように呟く。

そのあとも、霊子の言葉が続く。説教みたくなる。

それを幽は時には黙り、時には反論し聞いていた。

「俺だって……俺だってわかってるんだよ」

吐き捨てるように、語気を強めて言う。

「何？」

「言われなくなったって、俺だってわかってるんだよ」

言われ続けて沸点に達した幽は霊子に向かって怒鳴りつけるように叫ぶ。自分自身がかつていることを言われると、無性に腹が立ってくる。

「俺だって誠実じゃないことぐらいわかってるんだよ」

他人にぶちまけたことのない気持ち。心の中にしまっていた気持ちを吐露する。

「誰かが魂緒の代わりになってくれるかもしれない。そんな期待をして付き合うんだ。だけど、やっぱり魂緒にはなれないし、なれるはずもない。けど、それでも、魂緒のことが好きなんだ。忘れることができないんだ」

霊子に気持ちをぶつける。誰にもぶつけたことのない、本当の気持ちを……

「なあ。この気持ちどうしたらいい……」  
そう弱音を吐いた。

幽は靈子に魂緒のことを話した。

「そんなことがあったのじゃな」

魂緒の話聞き、幽の心の闇を垣間見た。そして、自分と重ね合わせる。自分も……  
自分のことを知ってもらおうと、靈子は話を始めた。

時をさかのぼること三百と数十年。京の都での話。

「兄上。明日、紅葉を觀に行きませんか？」

靈子は、部屋で読書に耽っていた兄に歩み寄り声をかける。

「明日か……すまんな、靈子。明日は大事な用があつて行くことは叶わぬ」

「そうでございませうか」

「明日は一人で行くのか？」

「いえ、父上も母上も姉上にも義兄上にも断られましたので行きません」

そう言つて、すねた様子で、踵を返す。

「靈子もまだまだ子どもよの」

靈子のいなくなった部屋で、兄はそつと呟いた。

その次の日。

靈子はお供もつけず、隠し通路から屋敷を抜けだしていた。

「一度やつてみたかったのじゃ」

普段の市井の様子を見てみたかった。いつもはお供をつけているためか、仰々しく対応される。だから、今回は少しくたびれた着物を選んで身に着けている。

「これが、普段の様子か」

「嬢ちゃん、見ない顔だな。ほれ、これ食べな」

団子屋の男が団子を一本差し出す。

「申し訳ございませんが、本日は持ち合わせが」

「お代はいいから」

「ありがとうございます」

京の人の温かさに触れ、そのまま歩みを進める。

祇園の通りを抜け、河原へとでる。

そこで一人の男と出会う。その男は河原で絵を描いていた。正確に言うと、絵を描いて

はいない。手に筆を持ってそのまま固まっている。しばらく眺めていたが、やはり動く気配がない。

男のことが気になるが、家を空けたままにすると侍女が騒ぎになりそうなので帰ることにする。

それから数日が過ぎ、今度は行幸の帰りで河原を通りかかった。その時も、同じく筆を手に持ったまま微動だにしていな。

それが気になって次の日。屋敷を抜けだした。

やはり河原には男がいた。

「何をしておるのじゃ？」

霊子は三度目にして声をかけた。

「ああ……ここで絵を描きたいと思っっているのですが、何か足りなくて」

男は視線をそらさずに、霊子に言葉を返す。

「だからここでこうしておるのじゃな」

「ええ」

男が振り返りつつ、相槌を打つ。

「宮様！」

「わらわを知っておるのか？」

「はは。私、なんだか絵を献上させていただいたため、お屋敷に伺わせていただきました。その折に、宮様を拝見したことがございます」

男は土下座の格好になり、頭を地面に擦りつける。

「顔をあげよ。わらわは忍びの身じゃ」

霊子がそう言うと、男は恐る恐る顔を上げる。

「元の位置に戻らぬか」

そう言われ、男は元の格好に戻る。

「絵が描けぬのか？」

「左様でございます。雨の日も、風の日もここにおりますが、描くことができないのです」

「他の場所で書こうとは思わんのか？」

「今は思いません。この場所が気に入っております、絵に残したいのです」

霊子は男にやつぎばやに質問し、慣れた対応で淡々と答えていく。

「そこからどのような景色が見えるのか、見せてもらえんか？」

「構いません」

男が座っていた場所をどき、霊子はその腰を下ろし、そこから景色を望む。

そこに広がるのは紅葉した柳の葉がユラユラと舞い散っている風景だった。冬に向けての準備を始める柳。儚くも寂しい景色に霊子も胸を打たれる。

「どうでしょうか？」

「……………」

靈子は言葉に詰まる。その姿に男は相槌を打つ。

「言葉になりませんよね。まさか京の都にこのような景色があるとは思いませんでした」

男はそのあとも饒舌に語り続ける。

靈子は男の感性に感銘を受けて、それからしばらく男の描いた絵を拝見させてもらっていた。

どの絵も靈子の感性に合い。話が弾む。

そして、いつの間にか日は沈みかけ、空は朱色に染まり始めていた。

「そろそろわらわは帰らねばならぬ。有意義な時間を過ごせたのじゃ。感謝する」

「ありがたき、言葉」

「またきてもよいか？」

「ええ。ぜひ」

靈子はそのまま走り去る。時間がまずいからだ。

「あっ……これだ」

男はこのあと暗くなるのもいとわずに絵を描き続けていた。

屋敷に帰った靈子はこっぴどく叱られた。さらに、隠し通路も見つけられ封鎖することが決まり、封鎖されるまで警備のものを配置することになった。

もうこれ以外にできることができなくなった。男と会うことができない。

もどかしい想いに駆られる。

男に会いたい。男に会いたい。そればかりを考えるようになる。

これが恋か——気づいたのはあれから一週間後だった。

そして、想いに気づくと居ても立ってもいられなくなり、どうにかして屋敷を抜けだせぬかと思案するようになる。

結局、警備が手薄になる明朝に隠し通路から抜け出すことに成功した。

そして、陽が昇る前に河原へと辿り着く。

まだ早いと思いつつもその場に腰を下ろし、柳を眺めていた。先週よりも葉は散っており、枝の見える量が増えていた。

「お嬢ちゃん。もしかして、ここにいた画家の兄ちゃんの知り合いか？」

ぼーっとしていたところ、後ろから不意に声をかけられる。

後ろにいたのはおじいさんだった。すぐその長屋に住んでいるらしい。

「画家の兄ちゃんから預かったものじゃ」

折りたたまれた紙を差しだしてくる。

「その人どうしたのじゃ？」

「亡くなったよ。そこで眠るように……最期まで絵を描いておったわ」

霊子はそつと紙を開く。そこには、柳の木の下を俯きながら走る女の子の姿だった。その女の子が霊子そっくりなのだ。

「描きたかった絵が描けたのじゃな」

よかったという温かい気持ちと、いなくなつて寂しいという冷たい気持ちがまじりあい、涙が溢れてくる。

「そんな恰好じゃ、寒いじゃろ。あつたかい飲み物を持ってきてやるから、そこで待つてなさい」

おじいさんは、長屋に戻つていく。

この歳で初めて芽生えた恋心。名前も知らない。手さえ触れていない。それが柳の葉のように散つてしまった。霊子の心は一足早く冬を迎えてしまった。

そして、霊子は絵を胸にしまい、秋から冬へと変わり始めた鴨川に入水した。

「……………」

幽は言葉を失つていた。霊子の壮絶な過去。

幽の方が馬鹿みたいに感じてしまう。魂緒は生きている。一方、霊子の好きだった男は死んでしまった。手の届かないところに行つてしまった。

「なぜ？ 生きてればほかの恋があつたんじゃないのか？」

やつとひねりだした言葉がこれだった。まさに幽がこれだ。魂緒の代わりに恋を探している。

「そうかもしれない。だが、その時は彼しか考えられんかった。他の恋なんて考えられんかった。わらわは若かつたのじゃ」

「そうか……」

沈黙が二人を包む。

「でも、じゃあなんで、成仏しないんだ？」

「わからぬ。だが、未練があるんじゃない？」

何が未練かはわからないが、成仏できないのならばそうなのだろうと納得している。

「そうか……」

再び沈黙が二人を包む。

「成長しなくちゃな」

幽は霊子に聞こえないように小さな声で呟いた。

年が明け、大学生の幽は期末レポートに、テストに忙しくなる。そして、それも終わった二月。キャンパスに疎らにいる女の子たちが、ソワソワしている。

「おなごどもは何を浮かれておるのじゃ？」

霊子はその様子に疑問を促す。

「ああ、ヴァレンタインが近いからな？」

「なんじゃ。それは？」

「三百年もこの世界に留まっていて知らないのか？」

「わらわは、七月七日以外引きこもっておったからな」

「自慢にならないぞ」

幽は呆れ果てている。

「簡単に説明してやる」

「頼む」

霊子は空中で正座して聴く体制を作る。

「好きな男に、女がチョコを渡す日」

「それだけか？」

「それだけだ」

それを聞いた霊子は頭を抱えて、「なぜチョコなのじゃ？」とボソボソと呟いていた。

二月十四日になり、案の定幽は抱えきれないほどのチョコをもらっていた。

「毎年のことだが、これどうしよう」

もらえない男が一つチョコをもらえたら嬉しいものだが、毎年大量にもらえる男からすると煩わしいだけだ。

「また配るか……」

毎年恒例、友人に配ることにする。文句はもちろん言われるが、もらって行ってくれるのだ。

「すごいのじゃ……」

霊子はチョコを見て、感嘆の声を挙げていた。

そんな霊子の今日の衣装は、大正娘風の衣装だ。幽霊の霊子はチョコを渡すことはできない。だから、幽の希望していた、服を変えてみたのだ。ただ、年代はずれているが……

「やっぱり似合うな」

素直な感想が口から漏れる。

「次は、ああいうカッコを試したら、もつと似合うと思うぞ」

幽は一人の女の子を指差す。毛糸のコートに、ジーンズ。頭にニット帽をかぶった女の

子だ。

「この服にするだけでも勇気がいったのじゃ。だから……ちよつと持つてほしい」

「ああ、期待してる」

幽は微笑んでみせた。

新学期が始まった。幽も無事三回生になった。

そして、彼女の方も増えたり減ったりを繰り返している。最近では霊子も幽に対しての小言がさらに増えてきている。

それは幽に対しての嫉妬でもあるし、女の子に失礼だとの思いからだ。そして、霊子が幽に惹かれているというのもあった。

幽はというと、その話を聞かされた時に彼女と別れるのだが、しばらくすると新しい彼女を作る。

堂々巡りだ。

「幽。わらわを見よ」

そう言えたら楽なのにと、霊子は思う。

振り向いてほしい。だが、自分は幽霊。幽は生きている。ここでも叶わぬ恋。

なぜ自分はこういう運命にあるのか？ そもそも、なぜ自分はこうしてこの世界にとらわれているのか？

そんなことばかりが霊子の頭の中を流れていく。

悩みを抱えつつも、幽に冷たく当たってしまう。好きだから……自分一人を見てほしいから……ついつい言ってしまう自分がいる。

そんな葛藤をするようになる。

最近、母親のように小言が増えてきた霊子。

それが嫌ではない。

自分はマゾヒストなのか？ 魂緒の時もそうだった。きつく言われることが嫌ではない。

「ああ、俺って……霊子のことが……」

幽はそうして決意する。

あの日から一年が過ぎた。幽と霊子が出会った七月七日から。

そして、幽が朝目を覚ますとそこに霊子の姿はなかった。

あの日から、片時も幽のそばを離れなかった霊子の姿がなくなった。

『やっと解放された』と、出会った頃ならそう思っただろうが、今はそう思えない。近くにあった手ごろな服に着替え、母親の「朝ご飯は？」という声を無視して、家を出る。

空はねずみ色。今にも雨が降り出しそうだ。それは、幽の今の心を表すかのようにだった。

幽は宛もなく探し回った。

しかし、見つからない。そして、時間はただただ過ぎ去り夕暮れを迎えようとしていた。もう見つからないかもしれない。だけど諦めたくはない。

乳酸の溜まった足、息の乱れた呼吸。それでも走ることはやめない。

最後だから、最後と言いながら、見つからなければ次の場所へ。そして、なんと目かの最後。河原で、幽は霊子を見つけた。

「霊子」

霊子は、空を見上げていた。あの日、ヴァレンタインの日に幽が言っていた服を着て見上げていた。

「今日は星がきれいじゃな」

朝はどんより曇っていた空は変化し、澄み渡るようにきれいだった。

「そうだな」

都会の喧騒を離れ、幽かに瞬く光はきれいに見えた。

「よくこの場所がわかったな」

「まあ、カンに近いけどな。諦めなくってよかった」

幽は霊子に近づいていく。一步。

「なんだよその服。今は夏だぞ。そんな暑そうなカッコして」

「未婚の女が肌をさらすものではないと言ったじゃろう」

一步。また一步近づいていく。

「まだ、誰にも触れられてないよな」

そして、霊子を強く抱きしめる。

「俺は、霊子のことが好きだ」

叫ぶように告げる。

「……わらわもじゃ。じゃが、わらわは幽霊、幽は生きておる。同じ時を生きてはおらぬのじゃ」

「そんなの関係ねえ。一緒にいられば、一年に一回でもいい。霊子の手に触れられれば、それでいい？」

幽は霊子の手を取る。

幽にとっても、霊子にとっても好きな人に初めて触れた。

それだけでも感慨深かった。

しかし、霊子には確かめなければならなかった。



「それは、魂緒のかわりなのか？」

「……違う。俺は霊子のことが好きなんだ」

「そうか。わかった」

霊子は黙ってうなづく。そして、姿が透けてきていた。幽霊なのだから当然なのかもしれないが、今までそういうことはなかった。さらに、足元から粒子となって消えてしまっている。

「おい。どうなってる？」

気が動転して、喚き散らす。

「ああ、わらわの未練は好きな人に触れられなかったことじゃったのじゃな」

「せつかく触れられたのに、通じ合えたのに、別れるなんて」

幽は気を落とす。

霊子は幽の手を強く握りなおす。

「わらわは幽と出会えてよかった。そうでなければ、わらわはまだ彷徨っておったろう。ありがとう。そして、幽。諦めるでないぞ。わらわを好きになるまで、魂緒とやらのことが好きだったのだろう。幽の心の中には、魂緒がおる。今もおる。今も惹かれておる。なぜ諦める。わらわを見つけた時のように諦めずに魂緒とやらを探せばよかるう。自分の心を偽る必要などないのじゃ」

その間も霊子の粒子化は進み、霊子の体の下半身はすでになくなってしまっている。

「じゃから……」

少し嗚咽が混じる。

「じゃから、わらわは幽の幸せを願っておる」

未練がなくなった。そういわんとばかりに粒子化は加速していく。

そして、霊子の右手の温もりを残し、霊子の粒子は天の川に重なるように吸い込まれていった。

それから十数年が過ぎた七月七日。

「お父さん。何、空を見てるの？」

結婚し、父となった幽は小学校中学年になった娘に指摘された。

「あそこに、お父さんの好きだった人がいるんだよ。りょう」

空にきれいに架かった天の川を指差す。

「星に？」

「ああそうだよ。りょう」

娘の頭をなでてやる。

「あなたが星を見上げるのはこの日だけよね」

「俺とお前を結んでくれたのはあの星だからな」  
そつと、娘と妻——魂緒を抱き寄せた。

そして……今あなたの手に触れることができる。